

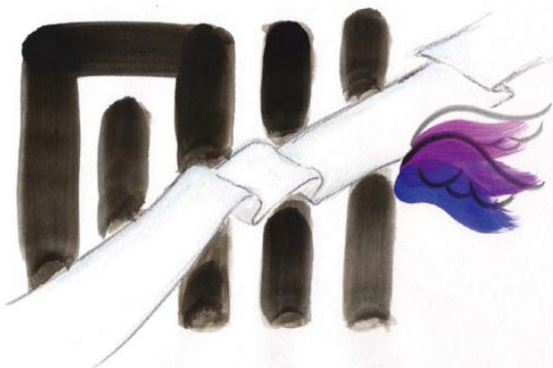
●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 11

松姫社の布曝女伝説



尋ねても
聞こえないふり
知らぬ顔
乙女の祈り
尊に届かん



伝説の二人が出会った地

「耳の神様」としても有名

熱田神宮の南門近く、民家の軒に挟まれるような狭い道があります。この道が布曝女通りといわれ、かつては熱田神宮の参詣道へと続いていました。その布曝女通りにひっそりと鎮座しているのが、松姫社です。「耳の神様」として知られていて、お参りすると耳の病気が治るといわれています。熱田神宮内の神楽殿北側にある清水社（熱田神宮末社）が「眼の神様」として知られていて、地元の高齢者の間では、二社巡りするのが習わしとなっているようです。

松姫社のはじまりは、伝説の時代まで遡ります。日本武尊が、父の景行天皇に東征を命じられ、尾張の国を通りかかった時、美しい女性がちょうど水のせせらぎが涼しげな清流で、布を洗ってさらしていました。日本武尊がその女性に国造がいる水上の里への道を探ねました。

しかし、返事がなく、何度尋ねても知らぬ顔をしているので、「もしかしたら耳が聞こえないのかもしれない」と諦めて、水上の里へ向かいました。実は、この女性こそ、尾



張の国造・乎止与命の娘で、後に日本武尊の妻となる宮簀媛命であったのです。宮簀媛命はこの時、耳が聞こえないふりをしたのだといわれています。

後になって、この故事にちなんでこの地を「布を曝す女」と書いて「布曝女」と呼ぶようになり、そこに宮簀媛命を祀ったのが、松姫社の創始といわれています。一説によると、宮簀媛命の兄にあたる建稲種命の墓の跡で、祭神も建稲種命であるともいわれています。なお、松姫社は熱田神宮の境外摂社の一つです。

美しい歌声で船乗りを誘う

魔女・セイレンの伝説

耳にまつわる話としてはギリシャ神話にも、魔女・セイレンの歌の話があります。セイレンは、英語ではサイレンのこと。辞書にも「siren=号砲、美声の女性歌手」と出ています。オデュッセウスがトロイア戦争の後、舟に乗って故郷のイタケ島に帰る途中のこと。オデュッセウスは、この近辺の海には、セイレンという魔女が住む島があり、近くを航海していく船に、美しい歌声で呼びかけると、その美声聞く者は惚れ惚れして魅せられ、声の方に引き寄せられて島に向かうと、魔女の餌食になるという話を太陽神の娘・キルケから前もって聞いていました。

オデュッセウスは船がセイレンが住む島に近づくと、船員たちに耳にロウを詰めるよう言いつけ、自分自身も帆柱に体を縛りつけさせ、どんなにもかいても決して解いてはならないと厳しく命じました。しばらく進むと、美しい歌声が波の上を伝わってきました。いよいよセイレンの島が近づいてきたようです。あまりにも美しく魅力的だったので

デュッセウスは身をふり解こうとしましたが、聞こえない船員たちは平気な顔。船員たちに合図して解いてくれるよう頼みましたが、船員たちは命令に従ってオデュッセウスを必死に押さえました。こうして一行はセイレンの誘惑から逃れ、無事に難所を通過したという話です。

オデュッセウスと宮簀媛命。どちらも、声に反応しなかったことで、幸運を引き寄せた点では同じですが、ギリシャ神話と日本の伝説では、声を発する側と受ける側が男女入れ替わっています。また、オデュッセウス一行の船員たちはロウで耳栓をしていましたが、宮簀媛命には耳栓はなく、聞こえないふりをしていました。思うに、日本武尊の声は聞き惚れるほど美声ではなかったのかもしれませんが、いや、あえて聞こえないふりをすることで、尊への秘めた思いを伝えようとしたのでしよう。

女性から声をかけて誘う「逆ナン」なんて言葉も聞かれる今の時代、女性のこんな奥ゆかしさは信じられない話かもしれませんね。



▲日本武尊と宮簀媛命が出会ったとされる場所にひっそりと鎮座する松姫社。

国道1号線からの鳥居を
目印に中に進むと社がある。



※今回は、高座結御子神社に伝わる「井戸のぞき伝説」をお送りします。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材/文/Icarus